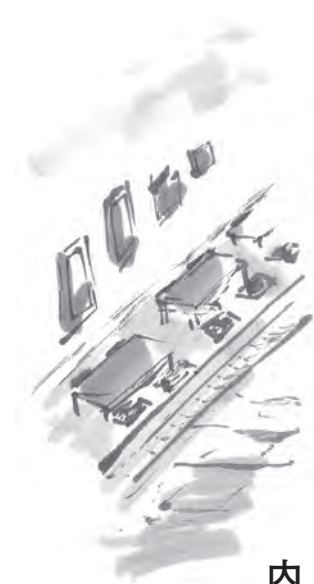


小さな展覧会



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

けるといふ特殊な店だった。

たまたま、娘の友人の方がそこで展覧会をするというので、私も食事方々出かけたのである。豊島区のこの辺りは、昭和の初め頃からアトリエ村が処々にあつて、文化的な雰囲気が漂っていた。詩人小熊秀雄がそれを池袋モンプルナスと名づけたのも今に語りつがれている。後に名をなす画家もそのアトリエに何人も住んでいた。

熊谷守一さんも私宅から五分位の近くに住んでいた。今は区立の美術館となっている。

さてその南天カフェはそれらのことを背景にしているという記事が最近新聞にも出て、開店前に並ぶほどになつたらしい。

私は魚のコースをとり、その日はすずきの梅干し焼きや、卵やき、野菜のゼリーあえ、コーンスープが出た。娘たちは肉コースで、豚の味噌焼き、サラダなどだった。お互いに分け合つていろいろ味わつた。

娘の友人の絵は、「大女」の主題で

ベッドより放たれた喜びは大きい。

そして勿論ひたすら介護してくれた娘たちや孫も、喜んでくれたのだった。

一時はもう駄目かと思う程だったのに、再生の力は廻りの人のおかげで湧いてきたという思いでいっぱいだった。

外食に行つたお店は、家から近くて和食のランチがおいしい南天カフェという所で、それは一軒の小さな仕舞屋の家である。

カウンター七席と、奥に八畳位の和室があり、絵などの小さな展覧会も開

先日久々に娘二人と外食をした。昨

年の夏ごろから貧血で病院に通っていたが、なかなか効果なく、娘がインターネットでいいホームドクターを探してくれたお陰で、体調が少しずつよくなり、先生が血液検査の結果、「どこも悪くない、貧血も平常になっているから、歩きなさい。歩くのがりハビリです」と言つて下さったので、私も全部歩いてゆけなくとも、近くのスーパーに娘の車で行き店内をカーポートを押して歩けるようになった。

大きな乳房の絵から、雲のようにふわふわの裸女の下に、小さな家がいつぱい見えるという珍しい絵で、ふわふわの女体の柔らかさに、母性愛を感じるような気がした。

それは買いたい人が出てきたという。久しく展覧会など行かなかった私には、只珍しい生の絵のもつ迫力に心が揺れた。

この小さな展覧会でぜひ見たい版画を書く知人を思い出した。

この方も娘の友人の夫で、武蔵美大出身の木工さん、つまり私方の出入りの木工さんである。今迄にも銀座などで個展を開いていらしたが、私は遠くてゆけない。木工のTさんの版画の絵葉書や、宮沢賢治の作品を絵本のようにしたものを知っていたが、その絵のつましくも静かな優しいたたずまいがいいといつも眺めていたのだった。Tさんが南天カフェで小さな展覧会をして下されば、私も見にゆけるのにと切に願ったのだった。

Tさんは責任感の強い本当にいい大

工さんで、その下に集まる職人さんたちも、穏やかなしつかりした腕のいい人ばかりだった。

3・11の地震の直後、近くに住むTさんがすぐに飛んできて下さってどんなにか心丈夫だったことも忘れられない。

娘の友人であるTさんの妻F子さんが又今どき珍しい古風な女らしい人で、このお二人を見ると、いつもいいご夫婦と思っていた。

私がベッドぐらしの時も、季節の花やおいしいものを持ってきて下さり、いつも励まして下さった。

南天カフェのことは新聞でご覧になつていたので、私が小さな展覧会のことをお話すると、すぐに会場を予約してくださった。

六月二十一日から七日間開かれるという。私は下の娘の車で連れていってくれることになり六月二十四日に又二人の娘とランチ方々見にゆくことがきまった。

その日の天気予報は、午前は曇りで

午後は又突風雷雨ということだった。十一時半に開く店にあわせて、少し早めに三人で出かけた。

店の前に水を打っている処だったが、すぐ入れてくれて、ランチの前に先ずゆつくりとTさんの版画を眺めることができた。

宮沢賢治の「風の又三郎」の作品は風になびく森の木々の版画で、「ドッドド、ドードー」の歌のようだった。

「甘いリングも吹き飛ばせ、すっぱい林檎も吹き飛ばせ」という風がきこえるようだった。

目の前に走りさる馬を、びつくりしながらもうれしそうな女の子と男の子の一枚もかわいらしかった。不意の出来ごとに驚く私方の三歳の凜がこんな目をするので、思わず微笑してしまふ。昔の作品とのこと。絵葉書も求めてきた。西瓜を冷やす井戸端の子供たち、それからハーモニカの版画は、懐かしい清らかな音色が漂うような作品であった。

ミシガンの「赤杉小学校」

宮地 智子
(詩人)



アメリカのミシガン州の州都である、ランシング市に近いイーストランシング市内にある「赤杉小学校」(英語では、「レッドシダー小学校」)の特徴は、アメリカ以外の国から来ている子供たちを多く受け入れていることであり、年に一度インターナショナルフェスティバルを開いて世界中の文化を紹介している。ここ数年、私は、娘一家の住んでいる彼の地に三月から五月にかけて滞在することになっている。

平凡社の百科事典によると、正しくは、エンピツビヤクシンといって、ヒノキ科であるそうだ。

ある年のインターナショナルフェスティバルのあった五月末日のその日は、冬から短い春を一気に飛び越え、白い夏雲の湧き上がるカッと日の照りつける放課後のことであった。

日本から来ている数名の子供たちは、親がミシガン州立大学で研究生活を送っている。インド・インドネシア・韓国・台湾・ジャマイカ・メキシコ・アメリカのいくつかの国々、デンマーク……など、民族衣装を身に纏った、色彩豊かな可愛らしい一団が、オリンピックの入場式よろしく、広い校

庭内を各国別に入場行進してくる。演奏は、プロのバイオリニストやパーカッショニストが受け持っている。

わが孫達は、一揃えしかない七・五・三の三歳の祝着を、着物と長襦袢に分けて着て登場。毎年、どこかの国の民謡が紹介されるらしく、この年は、韓国の「アリラン」が歌われ、西洋人のボランティアの女性がインドの民族衣装を着てインドの踊りを踊り、アフリカのどこかの国の打楽器はプロの演奏家によって力強くリズムカルに演奏された。

国の紹介の仕方では印象に残ったのは、ひとつの独立国として台湾が紹介されたことである。(中国政府もここ

までは文句を言って来ないらしい。)

さて、小学校には給食があつて、いくつかのメニューのうち、ピザやマツキンチーズといつて、マカロニに溶かしたチーズを絡めたものが孫たちの好物である。けれど、せめて私が居る間だけでも、小さな俵型のおにぎりの入つたおばあちゃん特製のお弁当を持参させることにした。

日本から住み込みで英語の勉強と、ペビーシッターを兼ねて来ている若いお嬢さんの運転する車に私も乗つて、孫たちを学校まで送り届けると、担任の、ミズ・ダンがやって来て「あなたはいつまでこちらにいらつしやいますか？」と訊ねられた。私がこちらを去つた後は給食を再開させる都合があるからだ。

また、英語の習熟度によって、クラスを分けるため、新しく日本から入ってきた生徒には、校長先生と学年主任とが両親と面接して丁寧に対応して下さる。

ところが、この、赤杉小学校の評判

が広がり、外国人が増えるのを喜ばない現地の人たちが、この小学校を廃校にせよ、という運動を起こしているらしい。この地域に外国人が集まつてくるのは好ましくない、という心情は抑えることのできない感情であるのは致し方ないことなのかも知れない。

春がやってくるとアメリカのミシガンに滞在するのが年中行事となつた私にとつて、厳しい冬が突然ぶり返す度に、酷い風邪を引き寝込んでしまうのも年中行事となつた。昨年はぐずぐずと引き摺つて日本に帰つても嗅覚が麻痺したまま現在に至るまで治らない。念のため検査したところ脳にも異常はない。

アメリカでは石鹸、洗剤、シヤンプーなどすべての香りが強烈で、マンガの香りなど甘つたるいものが多いので辟易していたところに風邪をひいて嗅覚にダメージを与えたのだからか。今では、あのコーヒの香りが以前に嗅いだ魅惑的な匂いとは違つた匂いに変換されて感じられる。いつも

使っているオーデコロン匂いもまた、違つた匂いに変換されている。

ところで、日本に帰つて、これ以上にシヨックなできごとがあつた。何のきっかけだったか、ある友人と国旗、国歌の話に及んだ際、相手が非難がましく私のことを筋金入りの右翼だと言つたことである。ミシガンの赤杉小学校の廊下の壁には各国の旗が並べてあつて、日の丸は日本の国旗として認識されていたしオリンピックでも同じ旗が掲揚されているのに。昭和二十二年生まれの私は子供の頃から当然のこととして「君が代」を国歌として認識している。日の丸のあの赤い色は戦争で流した血の色であると言つて国旗として認めないし、「君が代」は文法的にも誤りがあり認めないと主張するその人は、公立高校の教師である。強烈な刺激によつて麻痺した嗅覚が、本来の匂いを感じられなくなつたと同様、その人もまた、何かの刺激によつて考え方を変換されたのじやないだろうか。

人縁、仏縁



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

(文芸評論家)

古本屋が次々と姿を消している。私
が利用する駅近くにあった古本屋は店
を閉じてファーストフード店に貸して
いる。もう二軒あった古本屋はどうの
昔に店仕舞いをしてしまった。隣の駅
近くにあった三軒の古本屋もずっと以
前になくなった。人が本を読まなく
なったのだから、古本屋の消滅は文
化の破綻の一つを示すもの、と私は
思っている。

それでも私が住む地域で、川越街道

沿いに司書房(練馬区北町)という古
本屋が頑張っている。以前は池袋に店
を構えていたというが、今の場所にい
つから店を開いたものかはわからな
い。私は古書即売店の「和洋会」の目
録で店の名前を知っていた。

昨年、司書房の近くに用事があり、
久しぶりに立ち寄ってみた。『日本史
年表』・『評傳眞山青果』などの本を購
入した。代金を払うとき、店番の女性
に「司修(つかさおさむ)さんとい

作家兼画家がおられますが、司書房さん
も司修さんと同じく群馬県のご出身で
すか」と訊いてみた。するとその女性
は「主人は北海道です」と応える。
「北海道のどこですか」と尋ねると、
「沼田です」と言う。

驚いた。「私は、北海道の深川の生
まれです」と話すと、今度はご婦人の
方が驚き、店の中に声を掛ける。「お
客さん、深川の生まれですって!」

主人が奥から出てきた。主人は沼田
高校の出身で、上京し、大学を出たあ
と古本業界に入ったのだという。

私の祖先は白石藩に仕えていたが、
徳川政権の崩壊と共に没落し、その
後、祖父が北海道の札幌に渡った。私
の生地は深川を起点として、留萌線の
駅は順に北一己・秩父別・北秩父別・
石狩沼田(沼田)であったと思う。長
年、近くに住み、司書房に時々立ち
寄っていたのに、親しく言葉を交わす
こともなかった。私は古本屋さんとは
親しくならないようにしてきた。親し
くなると店頭の廉価本をなんとなく買

いにくくなるからだ。保昌正夫（文芸評論家・故人）は木本書店（板橋駅近く）へ行くと、店頭の百円均一の中の本を買い、コーヒーをご馳走になってくる、と自慢（？）していた。

司書房主（中野照司）と話をしながら、高校生のとき骨折して、沼田の接骨医に通ったことを思い出した。

「沼田にお年寄りの接骨医がおりましたね」

「山下さん」

「そうそう山下さん。あのお爺さん先生は大変な名医で北海道全土から治療に来ていたみたいですね」

「私も診てもらったことがあります。あの人は折れた腕に木を添えるだけで治してしまう人でした」

以前、本誌に書いたことがあるように思うが、深川出身の詩人右近稜とは電車の中で知り合った。長谷川伸展を見るために花村奨や小野孝二らと共に横浜まで出かけたとき、右近も一緒に来ていて、電車の中で話しているうちに互いに深川出身であることが分かっ

た。

そういえば、昔、福田清人家の新年会でたまたま隣に座った須知徳平（吉川英治賞受賞作家）が、私が卒業した高等学校の教員をしていたことを知った。これも奇遇というべき出会いであつた。そうして最近、同人誌「P e g a d a」を出している春田道博（古書店アニマ経営）と知り合った。この人も深川に生後まもない時から四歳まで住んでいた。たまたま同人誌のことで問い合わせをしたとき、深川ゆかりの人であることを知った。

これらは故郷がとりもつ縁であろうが、人と人との出会い、縁というものは、案外、宿命的なものではないのか、と思う。

ところで、大正時代、長野県上田市に清水澄子（一九〇九—一九二五）という文学少女がいた。澄子は十五歳のときに、生来の孤独癖から自ら命を絶った。遺稿集『さ、やき』は、ベストセラーとなった。私は、古本屋で袖珍本の『さ、やき』と戦後に出された

同題の文庫判を購入した。作品を読むうちにもう一度澄子を世に送り出したかと思ひ、『さ、やき』を再編集し、また『金子みすゞと清水澄子』と題する本を上梓した。

不思議なことがあつた。私が澄子の本を編集しているころ、上田市が澄子を第二の金子みすゞとして世に送り出すとして話し合いを重ねており、澄子の弟の子が澄子の生家跡に文学碑を建てようとしていた。上田市・澄子の甥・私の三者が、互いの行動を知ることなく、時を同じくして清水澄子顕彰とでもいうべき行動をしていたのである。その後まもなく、キングレコードから澄子の作品を朗読したCDも発売された。

上田市の行動と澄子の甥の文学碑設置。また、私はどうして清水澄子の墓捜しをし、墓参をし、熱っぽく澄子ゆかりの地を歩き、関係者を訪ねて情報を蒐集しようとしたものか。私はあの不思議な（清水澄子現象）を偶然ではない、仏縁であると思っている。

六十九年目の夏



佐川 毅彦

今年、は終戦から六十九年目になる。沖縄では六月二十三日が終戦の日である。慰霊の日と呼んでいる。それは沖縄守備軍の司令官が自決して、日本軍の米軍に対する組織的抵抗が終わったからである。

をめぐりながら戦争体験を語ったと書かれていた。六十九年前、高等女学校から学徒動員されて、壕内で負傷兵の看護をしたり、もがれた兵士の腕や足を運んだり、爆弾の破片で親友を失ったそうで

しかし、日本兵の抵抗は日本が降伏した八月十五日以後も続いてさらに多くの県民が犠牲になっていった。太平洋戦争での沖縄戦は二十万人を越す戦死者をだし、約十万人は兵隊以外の一一般県民や子供だった。六月十六日の沖縄タイムス紙に私の母の友人の老婦人が高校生ぐらいの二人の女の子とうつつている。新聞によると、孫をつれて戦跡

ある。

私の父の義弟から一週間前に聞いた話だが、私の祖父は家には危ない、祖父の両親を近くの壕に残して、四人の子供をつれて、南部の方へ避難して、子供たちを安全な所に置いて、両親を連れに引き返したが、途中あまりにも爆撃がはげしく、やむなく子供たちの所へもどるしかなかった。そしてその後両親と会う事はなかったそうである。

最近では沖縄戦で生き残った人々の体験談が毎日のように新聞記事になる。そして県内各地で自らの悲惨な体験を語り始めるようになった。体験者はかなり高齢で、今のうちに聞いておかなければ二度と聞けなくなってしまうだろう。私たちは彼らの体験をできる限り聞いて、悲惨な戦争が忘れ去られてしまわないように後の人に語りつづけてゆかなければならないと思います。



新たな「組手細工」の世界を開く
森本建具店三代目、森本隆氏。

「日本建築の美を象徴する「障子」^{しょうじ}」。

平安時代にはその歴史は始まり、鎌倉時代には現在のように細い格子を使うようになった。その伝統の技が、今の暮らしに花開く。

香川に伝わる伝統工芸品

伝統の建具から生活雑貨まで

組手細工

「くでざこく」

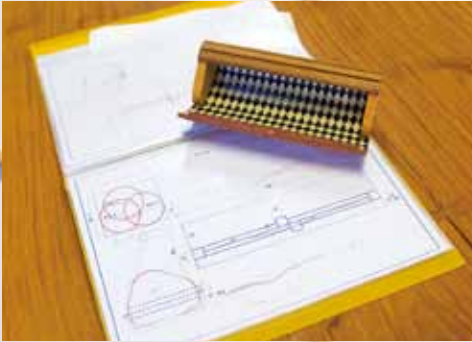
歴史の中で技を磨き上げてきた「組手障子」。江戸時代末期には、格子にさまざまな装飾を加えることで、さらに繊細な技を磨き上げてきた。豪邸や料亭の部屋を美しくしつらえてきたその建具たちも、現在ではすっかり身を潜めてしまった。けれども、その技が消えたわけではない。

高松市三谷町の「森本建具店」では、三代目ご夫妻の手によって「組手細工」の名品が生まれている。



「組手細工」の技法を生かしたハンドバッグ





森本建具店の三代目として、組手障子の技を受け継ぎ磨いてきた隆さん。隆さんの手で浮かび上がる亀甲や格子の美しい伝統文様。その文様を生かすのは、元服飾デザイナーという奥様の理恵さん。暮らしの中で生かせる「組手細工」のアイデアを理恵さんが次々と考え、二人のチカラで新商品が出来上がる。





木組みの優しさが伝わるポシェットや眼鏡入れ。



内も外も美しい万華鏡。



万年筆



パズル



「虹」と名付けられた作品。組手の繊細な木組みの間から七色に変化する美しい光が漏れる。

職人の技を未来につなぐ

「組手」とは、溝をきった木と木を組み合わせて、さまざまな文様を生み出す技。もちろん、釘も接着剤も一切使わない。凹凸の組み合わせのみで、美しくも頑丈な細工が完成する。この技を習得するためには、かんな研ぎに二年、見習いで三年と言われてきた。現在では機械を使うこともできるので、昔ほど厳しい修行ではないが、それでも簡単に取得できる技ではない。

隆さんは先代より「組手障子」の技を受け継ぎ、建具や住宅家具に取り組んできた。けれど、現在ではそうした注文は少なくなつた。このままでは、貴重な技が時代の中に消えてしまう。そこで、森本さんご夫妻は建具にとられず身近な品々の中に、この技を生かすことを考えた。伝統の技を未来につなぐ森本さんご夫妻の努力。その思いが結晶するような伝統文様の品を傍らに置いて、今宵は伝統の酒を楽しもう。



ポケットティッシュケースなど身近な品々にも技が光る

主題



志^し村^{むら}榮^{よし}守^{もり}
(評論家)

今、スポーツで大活躍する選手の明るい話題の陰で、自らの人生を粗末に扱い、規範を簡単に逸脱する人が、ニュースに連日のように登場する。一見、華やかな世相だが、何かを欠くのか、とつい思いたくなる。

話は転じるが、際立った個性で人生を駆け抜けた人がいた。若い頃、自らに不徳を感じたのか、他人のために身を粉にして尽した。信じるものがあつたから、それができたのかも知れないが、その努力は相当なものだった。

しかし、中高年という年齢に差し掛かった頃、その純粹な行為にはそぐわない状況を招来し（本人は、そのように判断されたと思う）、受けた衝撃と

疑念は大きかったらしく、それまでの尊い生き方には、きわめてふさわしくない最期を遂げてしまった。実は、この人のそんな人生の経緯が、かなりの期間、心にひっかかっていた。

月日は経過し、小林秀雄の世界に親しんで振り返ると、そこには、純粹な心の持ち主が、この人生には別の視点とか発想もあることを弁えない時に嵌る、一種の陥穽がある、そんな見解へと変化した自分がいた。

ごく当たり前のこととして、人間行為には、報酬とか見返りが想定される。善行に対しても、「神」からの何等かの褒美を期待したとしても、少しもやましいことではない。異国の先人

にも、積善の家に必ず余慶（「喜びごと）有り」とある通りであろう。

ところが、以下のような引用も必要となる日が訪れるのも、人生というものらしい。小林は、『私の人生観』で、若き日の太田道灌の逸話を紹介したその先で、こう書いている。

「私達の心の弱さは、この非人間的な理法を、知らず知らずのうちに、人間的に解釈せざるを得ない。」

私達には、善行や誠意を尽くしたのに、目の前にしたのは、まったく不本意な状況であった、という皮肉な経験はあるものだ。ただ、小林すら「非人間的な理法」と妙な言葉を使うくらい、「神」という言葉を使い難い状況が社会にあるゆえか、話題になる事すら稀れと言える。

従って私達は、その状況を一方的に「人間的に解釈」して、はばからない。つまり、その状況を嫌悪の対象とする。しかし、目の前にしたその状況は、そのように解して、他に顧慮すべき何もないのだろうか。

ここで、小林が最晩年期、長年の執筆生活を送ってきたが、書き残したことがある、と言わんばかりに見える正宗白鳥『入り江のほとり』を取り上げた、『感想』から以下を引く。

「作者と覚しい人物が、東京から別段、用事も無いのに、ふらりと故郷の海岸の村を訪れ、又ふらりと還つて了ふ。その間に彼が見た、肉身（＝親）達の退屈無味な生活が、まことに無造作に語られてゐる。」

と内容を紹介した先に、それは出て来る。

「作者が、憎しみも愛もなく顧みたのは、作者自身の姿だ。詩人でなくては、決して捕へる事の出来ない深い自己なのである。」

ここの「深い」に、晩年期の小林の万感が込められていると、いよいよ思えて来る。文字通り深い奥行きを感じさせるからだ。

冒頭の話とここで係わるが、善行とか誠意が招いた状況が、肉眼にはいかに不条理を映つたとしても、それは

言つてみれば「人間的な解釈」にとどまる。あるいは固執のすることでもある。視点、発想を変えれば、それは自身が隠し持つ時間（私的な歴史）を靈妙に相関することかも知れず、すなわち、「深い自己」との対面とも別言でき、善行を積んだことに対して、「神」が応えた一種の結実とも受け取ることができる。この切り換えは劇的だが、それだけの何かをもたらすと言える。

さて、善意に加え才気ある人は、現況を何とかしたいという衝動が強い。ところがこの美徳は見方を変えると、

実に厄介千万な代物でもあるのだ。小林は、『ヴァレリイ』で、デカルトに触れ、以下のように書いている。

「殆ど二十年間、恰も時間の飾り気のない単調に耐へた様に、黙々と自分の内奥の単純な主題に耐へて来た。」

「内奥の主題に耐へる」が、いかにも非生産的、消極的と映る。しかし、そんなに単純ではないと、直覚が目覚める日は訪れる。実はここには、この人の思想の秘める秘儀、いわば私的メ

ソッドが隠れているのだ、と。

また、小林『ソヴェットの旅』（＝溝演を文章化）には、「ドストエフスキイを読んで、私は、文学に関して開眼したのです。」とあるそうだが、これは瞬時にあの逆説（＝前号で既述）を想起させる。つまり、「主観」はあの逆説と強い類縁関係にあるのでは、と。

「僕は、ドストエフスキイの作品を精読した時（中略）、遂に否応なく納得させられた一事は、彼の信念の驚くべき単純さであった。」

さらに、『川端康成』にこうあるところが後押しして、類縁どころか、両者は同じものであり、従つて「耐へる」という動詞が能動性を帯び、重い意味を持つことになる。

これらを概観すると、小林の著作を読む喜びとは、目の前の文章が、「主題」（＝あの逆説）とシーニム（同義）の関係にある、また、大半の作品でこの関係性が遠方の灯の如く明滅すること、それを逐一、確認する、このことにあると言える。

僕はいつたい何者なのか

片岡義男
(作家)



二、三年前、当時の僕が書きたいくつかの短編小説を新聞で批評した文芸評論家が、いまにいたつてもこのような短編を平気な顔して書くことのできるお前は、「いつたい何者なのか」と、なかば自問自答していた。作家としての正体のようなものを、その評論家はつかみそこねていたのだろう。

僕は何者なのか。変わり者。偏屈

者。お調子者。跳ねつ返り者。浮気者。者という字を「もの」と読む、者の例はたくさんある。働き者。若い者。使いの者。親切者。奢る者。無用の者。これは、「無用の者、入るべからず」という注意書きで子供の頃によく見かけた。その者、という者もある。変わり者くらいなら多少は当てはまるかもしれないが、それ以外の者

は、自分に当てはめたくない。ただし、お前は何者なのかと問われたなら、その者です、という返答はあり得る。日本語の使いかたとして正しいかどうかは、別の問題として。

者というひと文字を「しゃ」と読む者の例には、どんなものがあるのか。目撃者、という者をまず僕は思いついた。愛国者や学者あたりまでは、誰もが知っているだろう。そうだ、長者という者がある。日本昔話のなかでは、何人もの長者がまだ現役だ。僕に当てはめる言葉としては、筆者がある。筆を持つ者、あるいは、筆で書く者、という意味だろうか。聖者がいる。これは「せいじゃ」と読む。勝者、そして敗者。ワードプロセサーで「はいしゃ」とキーを打って変換したら、歯医者がスクリーンにあらわれた。これも確かに者のひとりだ。盛者必衰、という四字熟語のなかに登場する盛者は、「しょうじゃ」と読む。ずっと昔には「じょうじゃ」だったそうだ。生者は「せいしゃ」と読む。これになら

僕も文句なしに該当する。生者は死者と対をなす。

いまはまだ明らかに生者のなかの、どちらかと言えば変わり者の、しかし働き者と評しても過言ではないような、あるひとりの筆者。僕は何者なのか、という問いに対する答えとして、やっとこれだけのことが判明した。もつと明らかにならないか、という気持ちがある。「もの」そして「しゃ」である者に続いて、家という漢字ひとつを、僕は連想として引き出した。

努力家。節約家。ワードプロセサーの変換でちゃんとスクリーンに出て来る。そうだ、作家があつた。これは当てはまる。ある社会的な状況のなかで、当人が引き受けている役割、あるいは、当人を評価するためのひとつの側面としての、者や家なのだ。作家という側面が加わったところで、これまでではつきりした部分を整理しなおすと、次のようになる。いまはまだ明らかに生者のなかの、どちらかと言うなら変わり者の、しかし働き者と評し

ても過言ではないような、たまたま作家であるところの、とあるひとりの筆者。僕は何者なのかと問うなら、いまのところその答えは以上のとおりだ。作曲家。画家。彫刻家。作家とならんで建っている何軒もの家、と言つておこうか。専門家、という家は、これらの家をすべて取り込むような、大きな家なのだろうか。大家、という家もある。僕には当てはまらない。

者と家の次は人だろう。「じん」ないしは「にん」としての、人だ。偉人。賢人。常識人。どれも僕からは遠いようだが、変人となると距離がやや近くなる、という気がする。奇人はどうか。超人。哲人。鉄人という言い方は最近のものだ。凡人。これは字面が良く、まずその意味で捨てがたい。達人。名人。いずれも遠い。こういう人たちは、いつもどこにいろのか。「じん」ではなく「にん」だと、差出人、受取人、保証人、立会人など、誰もが果たすべき社会的な義務、としての意味合いを強く帯びるようだ。住所

氏名保健証だろう。そうだ、保健証と言えば、被保健者と呼ばれる者がいた。

野郎。奴。男。あいつ。こういった言葉も、人が何者であるかを第三者が判断するにあたって、いまでも多用されている。野郎や奴は、その人の主として性格の一面を、かなり強く否定するときに用いられる。馬鹿な野郎だよ、あいつは、という言いかたのなかでは、野郎とあいつが同時に使われている。奴もこれでおしまいだね、などという言いかたは、いまこの瞬間にも、日本のいたるところで、じつに多くの人が使っているのではないか。男は肯定と否定のどちらにも使われる。いい男。立派な男。見上げた男。といった男たちとおなじ地平に、自分では手を汚さない男、口先だけの男、正論しか言わない男など、接点を持ちたくない男たちが、無数にいる。お前はといった何者なのか、と言いかたは、とらえどころがなにひとつないという意味において、最大限の褒め言葉なのではないか。

「五十歩百歩」考

山西 靖彦



「五十歩百歩」とは、「多少の違いはあるにしても、似たりよったりで、結局大した違いがないこと」あるいは「わずかな違いはあっても、本質的には同じであること」という意味で現在も使われています。

この出展は「孟子」の「梁恵王章句上」で、梁を訪れた孟子に恵王が尋ねるところから始まります。

梁の恵王曰く「寡人の国に於けるや、心を尽くすのみ。河内凶なれば、即ち其の民を河東に移し、其の粟を河内に移す。河東凶なれば、亦然り。隣

国の政を察するに、寡人の心を用うるが如き者無し。隣国の民少なきを加えず、寡人の民多きを加えざるは、何ぞや」と

（梁の（恵王が言う「私めが国を治めるにあたっては、民に心を尽くすようにしている。河内地方が凶作のときは、その民を河東地方に移し、河東地方の穀物を河内地方に移します。河東地方が凶作のときもまた同様になります。ところが隣国の政治を観察してみても、私のように心を用いている者はいません。それな

のに隣国の人口が減らず、私の国の人口が増えないのは、なぜですか。」と）

孟子対へて曰く「王戦いを好む、請ふ戦いを以って諭へん。填然として之に鼓し、兵刃既に接す。甲を棄て兵を曳きて走る。或いは百歩にして後止まり、或いは五十歩にして後止まる。

五十歩を以って百歩を笑わば如何」と（孟子が答えて言う「王は戦いを好まれるので、戦いで諭えさせてください。ドンドンと攻め太鼓が鳴り、武器が火花を散らしている。そこで兵士が兜を捨て武器を引きずって敗走します。ある者は百歩逃げてから踏み止まり、あるものは五十歩逃げてから踏み止まりました。五十歩逃げた者が百歩逃げた者を嘲笑したとしたら、これはどうですか。」と）曰く「不可なり。直だ百歩ならざるのみ。是も亦走るなり。」と

曰く「王如し此れを知らば、則ち民の隣国より多きを望むこと無かれ」と（恵王が言う「よろしくない。ただ

百歩でないだけです。この者も逃げたことには変わりがない。」

孟子が言う「王がもしこのことを理解されるなら、人口が隣国より多くなることを望んではなりません。」と)

さて、この「五十歩」とはどの程度の距離であろうか。「一步」とは現代の感覚で言えば、六十センチ程であろう。とすれば、約三十メートル逃げた兵士が約六十メートルを逃げた兵士を臆病者と嘲笑したのであろうか。

ところがこの「歩」という漢字であるが、「左右の足が前後に並んでいる」形の象形文字で、二足のことである。一足すなわち半歩のことは「跬(き)」または「頃(き)」といい、五十歩とは百個分の足幅ということになる。

また、「歩」は長さの単位でもあり時代によって異なるが、孟子の時代の「一步」とは約一、三五メートルのことである。なお、「跬歩」「咫尺」「尋常」の語はいずれも度(長さ)の単位からできた熟字である。

いずれにせよ「五十歩百歩」の話は「六十メートル程逃げた兵士が百二十メートル程逃げた兵士を臆病者だと笑ったということになる。」両者の距離は約六十メートルと相当開いている。当時は戦国時代で戦闘行為はかなり大規模に行われていたと思われる。

戦場から六十メートル程逃げれば安全だと思えるが、まだ弓矢の射程内であり騎馬の兵に攻撃される可能性もある。また攻撃されれば反撃する意思もあると思われる。しかし百二十メートルも逃げれば危険はなくこれはもう完全な敵前逃亡といえよう。

したがって、六十メートル程逃げた兵士にとってはまだ命の危険な状態に置かれているのであるから、百二十メートル程逃げた全く安全な状態にいる兵士を臆病者と笑うことは当然で、それなりの理屈があると思われるのである。

しかし、戦闘を指揮する王の立場から見れば逃げたことの一事でもってけしからんと判断するのである。同じ行

為も立場によって評価が分かれるのである。

さて恵王であるが、孟子の前で自らを「寡人(徳の少ない者)」と謙遜して称しており、まわりの諸国の王たちよりも民衆のために心を尽くして政治をしていることを具体的に述べ、自分はいい王だと自負しているのである。孟子もそのことは十分に認めていたと思われる。しかし、梁の民から見れば、恵王も他国の王たちと同様で、領土の拡大を願う戦好きの困った王のひとりにはすぎないのである。

このように考えると、「五十歩百歩」の意味は単純に「似たりよつたり」というより「当事者にとつては、相当の差異があると認識しているが、立場を変えてみればそれほど違いがないこと」ということになるのではないかと。

孟子が戦争好きの恵王に戦争の話で諭えたことは、「王」と「民」の立場によるものの見方の違いを適切にかつ説得力をもつて説明していると思うのである。